

乳幼児を育てている母親の悩みと育児ストレス — 保育所児と幼稚園児の比較 —

野口 純子*, 小川 佳代, 松村 恵子

香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科*

Distress and Childcare Stress among Mothers rearing Infants — Compared with Day Nursery and Kindergarten —

Junko Noguchi *, Kayo Ogawa and Keiko Matsumura

*Department of Nursing, Faculty of Health Sciences,
Kagawa Prefectural College of Health Sciences*

Abstract

The purpose of the this study was to determine the childcare stressors experienced by mothers rearing infants, and the characteristics of their distress. Three hundred and sixty-five mothers living in town A were subjects of this study. Factor analysis was conducted, and the following 6 factors were extracted: Factor I, “unreasonable behavior of children”; Factor II, “mothers having no time for themselves”; Factor III, “lack of understanding and cooperation of husbands”; Factor IV, “engaged in rearing children alone, and isolated from society”; Factor V, “problems in eating patterns of children”; Factor VI, “coping as parents”. A total of 197 mothers (54.0%) indicated that they had distress. The contents of distress were “issues regarding the development of children”, “issues regarding the physical concerns of pregnant mothers”, “the feelings of mothers toward childcare”, and “issues regarding childcare support”. It was revealed that the mothers mainly consulted with their spouses and their own mothers about their problems, while only a few consulted with nurses. Thus, it might be suggested that it is necessary that nurses provide more support for mothers rearing infants.

Key Words: 育児ストレス (stressor in child care), 因子構造 (factor structure),
母親の悩み (distress of mother), 子育て支援 (childcare support)

*連絡先: 〒761-0123 香川県高松市牟礼町原 281 番地 1 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 野口 純子

*Correspondence to: Junko Noguchi, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Murecho-hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123 Japan

はじめに

女性の社会進出、核家族の増加、社会環境の変化等により子育てに悩む母親が増えている。母親の育児不安や育児ストレスについては、児童虐待や育児ノイローゼ等の社会問題となっており、母親自身の心身の健康や子どもの健全な発達に有効な子育て支援について検討することは重要である。乳幼児を育てている時期の母親は、子育ての楽しみや喜びだけでなく様々な悩みやストレスを抱えている。Lazarus & Folkman¹⁾は、心理学ストレスモデルに基づき、ストレスサーは「日常生活の中で起きる出来事」、ストレス反応は「ストレスサーを個人が認知し、対処した結果として現れるもの」としている。私達は、母親の育児ストレスに関する研究に取り組んでおり、三歳児健康診査に訪れた母親を対象に日下部ら²⁾が開発した育児ストレスサー尺度 (Maternal Parenting Stressor Scale: MPSS) を用いた調査を実施した。その結果、因子構造の特徴として『子どもの行動』『育児中の母親の環境』『夫の考え方や夫のサポートの程度』『子どもとの関係』が母親のストレスサーとなること^{3) 4)}、非就労の母親の方が育児ストレスを感じやすいこと^{5) 6)}が明らかになった。

この結果をふまえ、地域における子育て支援の実践に繋げる為に、本学近郊の保育所及び幼稚園に子どもを通わせている母親を対象に調査を実施し、育児ストレスサーの因子構造と母親のもつ悩みの内容及び利用する施設の違による特徴について分析し、看護職としての具体的支援内容について検討したので報告する。

研究目的

乳幼児を育てている母親の育児ストレスサーの因子構造と妊娠・出産・育児の過程における悩みの内容及び利用している施設の違による特徴を明らかにすることである。

方法

1. 対象：調査に協力の得られたA町内の公立保育所と幼稚園に通う子どもの母親495名に配付。回収できた365名(回収率72.5%)を分析した。

2. 調査期間：2003年11月～12月。
3. 倫理的配慮：公的機関の承諾を得た後、各施設長に研究計画書と調査票を持参し協力を得た。保育士及び幼稚園教諭を通じて研究目的と得られたデータを研究目的以外では使用しないこと、結果は個人が特定できない旨を明記した文書を添付し、同意の得られた母親に配付。調査票は無記名自記式とし、施設に設置した投函箱にて回収した。
4. 調査内容：先行研究²⁾に基づく育児ストレスサー尺度31項目を用いた質問紙調査法とし「1. ほとんどない」から「4. よくある」までの4段階リッカートスコアで回答を得た。この測定用具は、妥当性・信頼性が確認できており尺度の使用については、文書をもって作成者の承諾を得た。母親の悩みの内容については、①妊娠中から出産後の悩みの有無とその内容、②母親自身の健康に関する悩みの有無と相談相手、③子どもの健康に関する悩みの有無と相談相手、④近くに子どもを預ける人の有無とその相手等とした。
5. 分析方法：統計処理は、SPSS 12.0J for Windowsを用いた因子分析(主因子法、バリマックス回転)及び信頼性分析を実施した。「妊娠中から出産後の悩み」「自分自身の健康に関する悩みと相談相手」「子どもの健康に関する悩みと相談相手」「近くに子どもを預ける人」の有無は、保育所児群と幼稚園児群との関連について χ^2 検定を行い、 $p < 0.05$ の場合に有意差ありとした。「妊娠中から出産後の悩み」の自由記述内容は、記載された内容について意味内容が類似したものを分類し検討した。

結果

1. 対象の属性：
対象である母親の平均年齢は 33.3 ± 4.3 歳、就労者は209名(57.3%)であった。父親の平均年齢は 35.8 ± 5.0 歳、子ども数は平均 2.0 ± 0.8 人、第1子の平均年齢は 6.3 ± 3.1 歳、家族数は 4.5 ± 1.3 人、家族形態は核家族が267名(73.2%)複合家族98名(26.8%)であった。
保育所児群167名と幼稚園児群198名を比較すると、母親の平均年齢は保育所児群 32.4 ± 4.3 歳で160名(95.8%)の母親が就労者で

表1 対象の属性

		n=365		
		全体	保育所児群	幼稚園児群
母親	平均年齢	33.3±4.3歳	32.4±4.3歳	34.1±4.2歳
母親の 就労状況	就労者	209名(57.3%)	160名(95.8%)	49名(24.7%)
	非就労者	155名(42.7%)	7名(4.2%)	148名(75.3%)
父親	平均年齢	35.8±5.0歳	35.1±5.0歳	36.2±5.0歳
子ども数		2.0±0.8人	1.9±0.9人	2.1±0.7人
第1子	平均年齢	6.3±3.1歳	5.7±3.2歳	6.8±3.0歳
家族人数		4.5±1.3人	4.4±1.5人	4.5±1.1人
家族形態	核家族	267名(73.2%)	113名(67.7%)	154名(77.8%)
	複合家族	98名(26.8%)		

あった。幼稚園児群は34.1±4.2歳で49名(24.7%)の母親が就労者であった。家族の状況をみると、保育所児群では、父親の平均年齢35.1±5.0歳、子ども数1.9±0.9人、第1子の平均年齢5.7±3.2歳であった。家族形態は核家族が113名(67.7%)であった。幼稚園児群では、父親の平均年齢36.2±5.0歳、子ども数2.1±0.7人、第1子の平均年齢6.8±3.0歳であった。家族形態は核家族が154名(77.8%)であった(表1)。

表2 育児ストレスの因子構造

項目	因子負荷量						共通性	平均値	標準偏差
	I	II	III	IV	V	VI			
I. 子どもの聞き分けのない行動(9項目, $\alpha=0.845$)									
3. 聞き分けがない	0.770	0.175	0.064	0.058	0.072	-0.009	0.637	2.380	0.838
5. ぐずるとなだめにくい	0.678	0.160	0.006	0.038	0.007	0.250	0.549	2.028	0.878
7. 言うことを聞かない	0.653	0.205	0.067	0.042	0.136	0.066	0.498	2.542	0.844
2. 大人の理屈が通らない	0.632	0.156	0.007	0.081	0.173	0.034	0.461	2.339	0.838
6. 癪癪(かんしゃく)を起こす	0.599	0.118	0.019	0.085	0.071	0.106	0.397	2.037	0.902
25. よく泣く	0.543	0.052	0.031	0.248	0.204	0.190	0.438	1.747	0.899
4. 子どもの泣いている理由が分からない	0.506	0.131	0.083	0.079	0.090	0.151	0.318	1.614	0.745
1. まとわりついて離れない	0.447	0.203	-0.001	0.110	0.146	-0.159	0.300	2.304	0.877
13. 一人にすると泣く	0.332	0.182	0.063	0.327	0.194	-0.068	0.296	1.798	0.955
II. 自分の時間がない(6項目, $\alpha=0.859$)									
19. 自分の時間がない	0.153	0.807	0.132	0.189	0.117	-0.032	0.742	2.544	1.012
9. 子どもを育てるために我慢をしている	0.198	0.709	0.065	0.216	0.018	0.156	0.617	2.453	0.948
8. 一人になれる時間がない	0.246	0.680	0.065	0.209	0.092	-0.121	0.591	2.351	1.039
10. 子どものために仕事や趣味を制約される	0.254	0.675	0.088	0.173	-0.007	0.053	0.561	2.478	0.950
20. 自分のペースが乱される	0.265	0.592	0.121	0.181	0.125	0.245	0.543	2.364	0.909
17. 家事を全てする時間がないこと	0.093	0.440	0.136	-0.052	0.298	0.093	0.321	2.054	0.978
III. 夫の無理解・非協力的態度(3項目, $\alpha=0.877$)									
31. 夫が育児に非協力的である	0.065	0.092	0.900	0.148	0.051	-0.018	0.849	1.981	1.015
30. 夫が家事に非協力的である	0.097	0.081	0.809	0.161	0.101	-0.019	0.707	2.260	1.092
18. 育児は母親の仕事だと夫は思っている	-0.016	0.206	0.615	0.190	0.026	0.193	0.495	2.290	1.106
IV. 一人っきりの子育て、社会からの孤立(5項目, $\alpha=0.716$)									
11. 子どもと二人だけで家にいる	0.163	0.236	0.062	0.673	0.090	-0.111	0.560	1.710	0.950
12. 自分と子どもだけの世界で、社会との接点がない	0.096	0.185	0.005	0.587	0.022	0.203	0.430	1.422	0.714
22. 一人きりで育児をしている	0.090	0.215	0.349	0.557	0.065	0.155	0.514	1.664	0.887
23. 短時間子どもを預けられる人がいない	-0.041	0.114	0.176	0.447	0.034	0.091	0.253	1.636	0.985
29. 仕事を辞め、社会とのつながりが切れた	0.164	-0.013	0.137	0.249	-0.024	0.048	0.111	1.985	1.135
V. 子どもの食行動における問題(4項目, $\alpha=0.732$)									
15. 子どもが小食である	0.019	-0.034	0.022	-0.033	0.701	0.046	0.497	1.868	1.011
28. 思うような食べ方をしてくれない	0.250	0.208	0.096	0.027	0.616	0.257	0.561	2.151	0.951
14. 自分で食べたがらない	0.178	0.098	0.010	0.090	0.584	-0.005	0.391	1.603	0.833
21. 子どもに食べさせなくてはならない	0.169	0.312	0.049	0.126	0.432	0.107	0.342	2.084	1.020
16. 他の親としつけ方が違う	0.259	0.009	0.080	0.125	0.361	0.310	0.313	1.773	0.787
VI. 親としての対応(3項目, $\alpha=0.664$)									
24. どうしつけたらよいか分からなくなる	0.447	0.113	-0.096	0.290	0.269	0.509	0.628	1.911	0.859
27. よその子どもとの間に問題を起こしたときの対処の仕方がわからない	0.182	0.092	0.114	0.147	0.250	0.426	0.310	1.880	0.799
26. 毎日同じことの繰り返しをしている	0.225	0.301	0.162	0.298	0.243	0.323	0.420	2.420	1.036
	固有値	3.924	3.315	2.159	2.088	2.046	1.128		
	寄与率(%)	12.659	10.694	6.965	6.734	6.600	3.638		
	累積寄与率(%)	12.659	23.353	30.318	37.052	43.652	47.291		

2. 育児ストレスの因子構造

育児ストレス 31 項目を変数として、主因子法を用いて因子分析を行った結果、固有値 1.00 以上で 6 因子が抽出された。累積寄与率 47.29%、クロンバックの α 係数は 0.928 であった。因子名の命名については、著者らの先行研究³⁾に基づき行った。

因子 I は、「聞き分けがない」「ぐずるとなだめにくい」「言うことを聞かない」等 9 項目が含まれ『子どもの聞き分けのない行動』とした (α 係数 0.845)。因子 II は、「自分の時間がない」「子どもを育てるために我慢していることがある」「一人になれる時間がない」等 6 項目が含まれ『自分の時間がない』とした (α 係数 0.859)。因子 III は、「夫が育児に非協力的である」「夫が家事に非協力的である」等 3 項目が含まれ『夫の無理解・非協力的態度』とした (α 係数 0.877)。因子 IV は、「子どもと二人だけで家にいる」「自分と子どもだけの世界で、社会との接点がない」「一人っきりで育児をしている」等 5 項目が含まれ、『一人っきりの子育て、社会からの孤立』とした (α 係数 0.716)。因子 V は、「子どもが少食である」「思うような食べ方をしてくれない」「自分で食べたがらない」等 4 項目が含まれ、『子どもの食行動における問題』とした (α 係数 0.732)。因子 VI は、「ど

うしついたらいいのかわからなくなる」「よその子どもとの間に問題を起こした時の対処の仕方がわからない」等 3 項目が含まれ、『親としての対応』とした (α 係数 0.664) (表 2)。

3. 母親の悩み

1) 妊娠中から出産後の悩みの内容

悩みが有りと回答した人は、197 名であり、具体的内容を記述していたのは 192 名であった。全体 (総数 241 件) では、「子どもの発育に関すること」74 件、「妊娠中の母親の身体に関すること」59 件、「子育てに対する母親の気持ち」46 件、「育児サポートに関すること」20 件、「夫や家族との関係に関すること」20 件、「妊娠中の母親の気持ち」13 件、「仕事に関すること」9 件であった。

保育所児群 (総数 97 件) で多かったのは、「妊娠中の母親の身体に関すること」29 件であり、その内容は『つわりがひどい、切迫流産、入退院の繰り返し』等であった。次は「子どもの発育に関すること」24 件であり、その内容は『よくお乳を吐く、母乳とミルクの量がわからない』等であった。「子育てに対する母親の気持ち」は 18 件であり、その内容は『用事が多すぎてノイローゼ、育児を楽しめない、子どもとどう接していいのかわからない』等であった。「仕事に関すること」

表 3 妊娠中から出産後の悩みとその内容

	カテゴリー	全体	保育所児群	幼稚園児群		
		件数	主な内容	件数	主な内容	件数
1	子どもの発育や健康に関すること	74	よくお乳を吐く、アレルギー、夜泣きがひどい、母乳とミルクの量、離乳食を食べない、室温と肌着の調整	24	子どもの異常、高熱、母乳が足りない、赤ちゃんかえり、未熟児の為心配、指しゃぶり、上の子に手がかかる	50
2	妊娠中の母親の身体に関すること	59	つわりがひどい、切迫流産、切迫早産、頭痛がひどい、便秘、出血、双子、入退院の繰り返し	29	切迫流産、つわり、双子、切迫早産、妊娠中身体がしんどい、腰痛、はり止めの薬をずっと飲んでた	30
3	子育てに対する母親の気持ち	46	用事が多すぎてノイローゼ、孤独、育児を楽しめない、自己嫌悪、子どもとどう接していいかわからない	18	育児ノイローゼ、初めての子育てで不安、昼間赤ちゃんを二人でいると息がつまる、1日中イライラしていた	28
4	夫や家族との関係に関すること	20	主人や家族の協力が得られない、実母の入院、夫の入院、祖父母が非協力的	8	同居の義父母との関係、夫婦の不仲、子育て方針の違い、夫の協力、父親が忙しい	12
5	育児サポートに関すること	20	知らない土地で不慣れ、上の子の面倒をみてくれる人がいない、相談する人が近くにいない	4	新生児を預けるところがなかった、友人が作れない、入院中の上の子の世話、幼稚園の送迎	16
6	妊娠中の母親の気持ち	13	無事に生まれるか、妊娠中の子どもの成長、薬を飲んでしまったこと	7	無事に生まれてくるか心配、胎動が少なくモニターを何回もつた、風邪を引いて薬を飲んだこと	6
7	仕事に関すること	9	育児休暇のこと、復職のこと、仕事を続けていけるのか、職場の上司の理解	7	仕事を継続できるか、仕事との両立	2

は7件であり、その内容は『育児休暇が取れるか、復職が不安、仕事を続けていけるのか、職場の上司の理解』等であった。

幼稚園児群（総数144件）で多かったのは、「子どもの発育に関すること」50件であり、その内容は『母乳が足りないのではないか、子どもの異常、赤ちゃんがえり、未熟児の為心配、上の子に手がかかる』等であった。次は「妊娠中の母親の身体に関すること」30件であり、その内容は『切迫流産、つわり、妊娠中身体がしんどい、腰痛、はり止めの薬をずっと飲んでいた』等であった。「子育てに関する母親の気持ち」は28件であり、その内容は『初めての子育てで不安、昼間赤ちゃん二人でいると息がつまる、1日中イライラしていた』等であった。「育児サポートに関すること」は16件であり、その内容は『友人が作れない、入院中の上の世話、幼稚園の送迎』等であった（表3）。

2) 母親自身の健康に関することの相談相手

母親自身の健康に関することの相談相手が有りだと回答した人は、305名（86.2%）であった。相談相手は、配偶者181名、実母159名、友人52名、実父42名、自分の兄弟35名等であった。

保育所児群は、実母83名、配偶者69名が多かった。幼稚園児群は、配偶者112名、実母76名、友人31名が多かった。 χ^2 検定の結果、幼稚園児群では配偶者の占める割合が多く、保育所児群では実母の占める割合が多かった。看護職は、保育所児群1名のみであった（表4）。

3) 子どもの健康に関することの相談相手

子どもの健康に関することの相談相手が有りだと回答した人は、353名（98.9%）であった。

表4 母親自身の健康に関する相談相手

相談相手	(複数回答)		
	有りの総数 n=305	保育所児群 n=138	幼稚園児群 n=167
配偶者	181	69	*** 112
実母	159*	83	76
実父	42	22	20
義母	11	5	6
義父	3	2	1
自分の兄弟	35	19	16
保育所の先生	0	0	0
医師	10	5	5
保健師・看護師	1	1	0
友人	52	21	31

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

相談相手は、配偶者261名、実母240名、友人144名、医師114名、保育所・幼稚園の先生72名、義母92名等であった。

保育所児群は、実母116名、配偶者105名、保育所の先生48名、医師62名が多かった。幼稚園児群は、配偶者156名、実母124名、友人88名が多かった。 χ^2 検定の結果、幼稚園児群が配偶者と友人の占める割合が多く、保育所児群では保育所の先生と医師の占める割合が多かった。同じ悩みをもっているも保育所と幼稚園では相談相手が異なった。看護職は、7名と少なかった（表5）。

4) 近くに子どもを預ける人の有無

近くに子どもを預ける人が有ると回答した人は、212名（58.7%）であった。預ける相手は、実父母111名、義父母73名、友人・近所の人29名であった。有ると回答した人は、幼稚園児群が136名と多かった。保育所児群では、実父母に預ける人が多かった。幼稚園児群では、友人・知人と義父母の占める割合が保育所児群と比較すると多く、実家だけでなく夫の家族や友人・近所の人等にも援助を求めている（表6）。

表5 子どもの健康に関する相談相手

相談相手	(複数回答)		
	有りの総数 n=353	保育所児群 n=162	幼稚園児群 n=191
配偶者	261	105	*** 156
実母	240	116	124
実父	53	27	26
義母	92	40	52
義父	25	15	10
自分の兄弟	68	32	36
保育所の先生	72	* 48	24
医師	114	* 62	52
保健師・看護師	7	3	4
友人	144	56	* 88

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

表6 近くに子どもを預ける人がいるか

預ける人	(複数回答)		
	有りの総数 n=112	保育所児群 n=76	幼稚園児群 n=136
実父母	111	46	65
義父母	73	16*	57
実兄弟	13	5	8
祖父母	12	8	4
友人・近所の人	29	1	*** 28

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

表7 保育所と幼稚園児の比較

()内%

項目	保育所児群 n=167		幼稚園児群 n=198	
	有り	無し	有り	無し
妊娠中から出産後の悩み	78(46.7)	89(53.3)	** 119(60.1)	69(34.9)
母親自身の健康に関する相談相手	138(82.6)	29(17.4)	167(84.3)	31(15.7)
子どもの健康に関する相談相手	162(97.0)	5(3.0)	191(96.5)	7(3.5)
近くに子どもを預ける人	76(45.5)	91(54.5)	*** 136(68.7)	62(31.3)

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

5) 保育所児群と幼稚園児群の比較

「妊娠中から出産後の悩み」「母親自身の健康に関する相談相手」「子どもの健康に関する相談相手」「近くに子どもを預ける人」の有無について分析した結果、「妊娠中から出産後の悩み」が有りと回答した割合は幼稚園児群が多かった ($p<0.01$)。「母親自身の健康に関する相談相手」は、両群共に有りと回答した割合が82%以上であった。「子どもの健康に関する相談相手」は、両群共に有りと回答した割合が96%以上と多かった。「近くに子どもを預ける人」は有りと回答した割合は幼稚園児群が多かった ($p<0.001$) (表7)。

考 察

育児ストレスの因子分析の結果、「子どもの聞き分けのない行動」「自分の時間がない」「夫の無理解・非協力的態度」「一人っきりの子育て、社会からの孤立」「子どもの食行動における問題」「親としての対応」の6因子が抽出された。子どもの行動、育児中の母親の環境、夫の考え方や夫のサポートの程度、子どもとの関係が母親の育児ストレスとなり、三歳児を対象とした調査³⁾と同様の結果であった。今回の調査では、「子どもの聞き分けのない行動」「自分の時間がない」が各々第I因子と第II因子であったが、「夫の無理解・非協力的態度」が第III因子となり説明力の強い因子として抽出された。「一人っきりの子育て、社会からの孤立」は、第IV因子となった。このことは、本調査の対象者が保育所及び幼稚園に子どもを通わせている母親であったことが影響していると考えられる。家庭で子育てをしている母親の方が孤独な育児を感じていること⁶⁾は、保育所・幼稚園などの施設に子どもを通わせている母親だけでなく家庭で子育てをしている母親達が自由に

集える場所も必要であることを示唆している。次世代育成支援事業においても地域における子育て支援の拠点の整備を掲げており、保育所・幼稚園において実施することは、他の乳幼児や母親との交流の場だけでなく、子育てに関する母親の悩みや健康に関する相談が可能であると考えられる。

乳幼児を育てている母親のうち妊娠中から出産後の悩みが有ると回答したのは、197名(54.0%)であった。悩みの内容を分析した結果、『子どもの発育や健康に関すること』『妊娠中の母親の身体に関すること』『子育てに関する母親の気持ち』『夫や家族との関係に関すること』『仕事に関すること』『妊娠中の母親の気持ち』『育児サポートに関すること』の7つのカテゴリー分けられた。保育所児群と幼稚園児群を比較すると幼稚園児群が有りと回答した者が多かった。悩みの内容は、『子どもの発育や健康に関すること』50件、『妊娠中の母親の身体に関すること』30件、『子育てに関する母親の気持ち』28件であり、子どもの健康や自分自身の身体に関する悩みが多いことが明らかになった。清水ら⁷⁾の研究においても、子どもの発達に対する懸念は一般的なストレスであることが示唆されており、この育児ストレスはかなり避けがたいものであると述べられている。

また、「自分自身の健康に関する相談相手」と「子どもの健康に関する相談相手」の有無については、両群共に有りと回答した割合が多かった。「自分自身の健康に関する相談相手」は、配偶者、実母、友人が多く、幼稚園児群では配偶者の占める割合が多く、保育所児群では実母の占める割合が多くなっていった。「子どもの健康に関する相談相手」は、幼稚園児群では配偶者と友人の占める割合が多く、保育所児群では保育所の先生と医師の占める割合が多かった。同じ悩みを持っていても保育所児群と幼稚園児群では相談相手が異なることが明らかになった。これは、幼稚園児の場合には送

迎等に母親同士が交流できる時間があることも関係があるのではないかと考える。保育所児の場合は、就労している者が多く送迎時には保育士との交流はあっても母親同士が交流をもてる時間は少ないと考えられる。さらに、保育所児はかかりつけ医を決めている母親が多く⁸⁾、病気になれば受診し医師に相談することはあっても、気になることの相談相手としては身近な人に相談する傾向があるのではないだろうか。看護職は、相談相手としてどちらも少なかった。母親の悩みの内容は、『子どもの発育や健康に関すること』『妊娠中の母親の身体に関すること』等の健康面に関する内容が多く占めていることが今回の調査で明らかになっており、看護職も専門職の立場で相談に応じることができるのではないかと考える。荒木ら⁹⁾も、「看護職が今後保育園保健において期待されている役割は、①子どもと家族に対する健康教育・保健指導、②救急時の対応や様々な健康問題を抱える子どもたちの個別性に対応できる専門性、③異常の早期発見・早期治療への連携、が予測される。これに対応するために、看護職は専門性を高めるような研修の機会や問題を共有し共同で取り組むような、看護職同士の連携の場が不可欠となるだろう」と述べている。本県においても、病後児保育を実施している施設には看護職が配置されているが、看護職が常勤で配置されている保育所は少なく子どもの健康面の管理などで必要性があることが、保育所の管理者を対象に実施した調査¹⁰⁾において明らかになっている。

乳幼児をもつ就労女性の育児ストレスについて、平岡ら¹¹⁾は、「育児と仕事の両立をはかるための支援策として乳幼児をもつ母親自身がストレスを認知し自発的な相談や社会資源の活用ができることである」と述べており、多様な相談の場の必要性を示している。看護職が母親と子どもの健康に関する身近な相談者として、母親と子どもが集う場に出向くことによって、乳幼児を育てている母親の悩みに対する相談のきっかけとなる。また、母親自身の健康に関しては、妊娠中の母親の身体的悩みが多いことや育児サポートに関する悩みの中で入院中の上の子どもの世話に困った等の内容があった。清水ら¹²⁾は、「母親が病気や体調不良の時はサポートシステムによって、子どもを預けられるという安心感を与えるとともに実際に預けられる体制が望まれる」と述べている。施設を利用する母親の悩みに応じた支援内容が重要と

なる。

今後は、多様な育児サポートシステム作りと共に地域で行われている子育て支援事業に専門職として看護職が積極的に関わることの必要性が示唆された。

結 論

1. 因子構造の特徴は、三歳児を対象に実施した結果と同様であり、『子どもの行動』『育児中の母親の環境』『夫の考え方や夫のサポートの程度』『子どもとの関係』が母親のストレス要因となっていた。
2. 妊娠中から出産後の悩みの内容は「子どもの発育や健康に関する」「妊娠中の母親の身体に関すること」「子育てに対する母親の気持ち」が上位を占めていた。悩みが有りだと回答した割合は幼稚園児群の方が多かった。
3. 母親自身の健康や子どもの健康に関する相談相手は、配偶者と実母が多く看護職は少なかった。

おわりに

地域における子育て支援の試みとして、本研究で得られた結果をふまえた具体的支援として、妊娠中から出産後1年位までの母親と子どもの健康や悩みに対する育児支援冊子を作成した。さらに、家庭で子育てをしている母親を対象としたBこどもセンター（幼稚園と保育所が併設）における子育て支援事業に月1回参加し、保育士、保育ボランティア、栄養士の方々と共に看護職の立場で母親と子どもの健康相談や育児相談を行っている。これからも、母親と子ども達が集う場に看護職が出向き、他職種と連携を保ちながら、専門職として個別性を重視した子育て支援に取り組んでいきたいと考えている。

文 献

- 1) Richard S. Lazarus, Susan Folkman (1984) "Stress, Appraisal, and Coping" Springer Publishing Company, Inc., New York. [本明寛, 春木豊, 織田正美監訳 (2000) "ストレスの心理学 認知的評価と対処の研究", 実務教育出版, 東京, p3-229.]
- 2) 日下部典子, 坂野雄二 (1999) 育児に関わるストレ

- サーの構造に関する検討. ヒューマンサイエンスリサーチ 8: 27 - 39.
- 3) 榮玲子, 舟越和代, 小川佳代, 野口純子, 三浦浩美, 松村恵子 (2003) 乳幼児期の子どもをもつ母親の育児ストレス(第1報) - 育児ストレス要因の解析 -. 香川県立医療短期大学紀要 5: 11 - 16.
 - 4) 植村裕子, 三浦浩美, 野口純子, 舟越和代, 小川佳代, 榮玲子, 松村恵子 (2002) 香川県における3歳児をもつ母親の育児ストレス構造 - 育児ストレス尺度を用いて -. 香川母性衛生学会誌 2(1): 62 - 68.
 - 5) 舟越和代, 榮玲子, 小川佳代, 野口純子, 三浦浩美, 松村恵子 (2003) 乳幼児期の子どもをもつ母親の育児ストレス(第2報) - 対象特性からみた育児ストレス -. 香川県立医療短期大学紀要 5: 17 - 24.
 - 6) 野口純子, 三浦浩美, 植村裕子, 舟越和代, 小川佳代, 榮玲子, 松村恵子 (2004) 三歳児を養育する母親の育児ストレス - 就労母親と非就労母親の比較 -. 香川母性衛生学会誌 5(1): 23 - 30.
 - 7) 清水嘉子, 西田公昭 (2000) 育児ストレス構造の研究. 日本看護研究学会誌 23(5): 55 - 67.
 - 8) 小川佳代, 野口純子, 松村恵子 (2005) 子どもが病気のときの母親の対応 - 保育所児と幼稚園児の比較 -. 香川母性衛生学会誌 5(1): 52 - 57.
 - 9) 荒木暁子, 遠藤巴子, 羽室俊子, 佐藤秋子, 三好順子 (2003) 岩手県の保育園保健の実態と看護職の役割. 岩手県立大学看護学部紀要 5: 47 - 55.
 - 10) 野口純子 (2001) 看護職の子育て支援に関する研究 - 香川県における保育との連携に関する調査 -. 香川県立医療短期大学紀要 3: 157 - 165.
 - 11) 平岡康子, 松浦和代, 野村紀子 (2004) 乳幼児をもつ就労女性の育児ストレスと職業性ストレスの分析. 小児保健研究 63: 647 - 652.
 - 12) 清水嘉子 (2003) 育児ストレスの実態研究 - ストレス情動反応を中心にして -. 母性衛生 44: 372 - 378.

受付日 2005年10月31日